

注解『七十一番職人歌合』稿(十五)

下 房 俊 一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第三十三番および第三十四番の注解を収めた。

三十三番 紅解 鏡磨

〔職人尽〕

〔鶴岡放生会職人歌合〕八番左 鏡磨

おなしくは入江にやかてとりみかけ鏡も水の月をうつして

露深きかたはみ草をたもとにてしほりかくれはおもかけも見す

判云、月は、左の鏡を見るに百練の銅なるへし。所献君主なり、不明臣妾とかや。思なしもけたかく侍れと、右：
…仍勝と申侍へし。恋は…左歌、恋の哥はかくこそあらまほしけれとみえて、切なる様なり。可為勝歟。

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕鏡屋 みめわろきいくらの人に偽りの鏡のとがをいかけけるらん 〔吾吟我集〕鏡 人を見て人は人を

もたしなめば人こそ人の人の鏡よ 〔銀葉夷歌集〕寄鏡祝 いにしへを鏡の紋の鶴亀に御代もあやかれ曇りなき君(休甫) 〔人倫

訓蒙図彙〕鏡師 ……鏡磨ぐには、すずかねのしやりといふに、水銀みづかみを合はせて、砥の粉をまじへ、梅酢にて磨ぐなり。〔誹諧職

注解『七十一番職人歌合』稿(十五)

人尽〕べにとき・鏡磨 春風や紅はく酈の上りばな〔柯木〕 寒紅の一はけ咲くや葦椿〔沼津駅 同波〕 何にこの比丘尼触れけむ
寒の紅〔寥和〕 人も見ぬ鏡の裏や梅の花〔芭蕉〕 薄霜の眉毛も白む鏡とき〔万井〕 花の顔梅酢に知るやかがみとき〔知葉〕

見よや見よ月はますみの鏡とき〔憐松〕 鏡ときおのが貌見ぬ師走かな〔指水〕 玉の汗踏んだ鏡に骨や折る〔五明〕 むら雲の月
を拭ふかがみ磨〔万秋〕 水かねの始末も寒し鏡とき〔寥和〕 〔職人尽発句合〕二十四番右 鏡磨 雪水都の水の天下一 天下

一はさる鏡司が自贊なるを、都の水に云ひ流したる言葉の優艶なるによて、勝とす。〔浄玻璃の鏡なりとも此の上はあらじ〕

〔職人尽狂歌合〕右 べにとき 紅粉ときも月を見る夜はおのが手のあけになるまでうかれてぞを。……右、とどこほらず、むつか
しげなる所なく、おかしければ、勝負のけぢめ分かちがたくこそ。 / 左 紅粉とき 澄む影もさすがに秋をときべにのあかしは
月の得意先なり 左、秋を時とめづるに、解を秀句に添へ、さて源氏物語なるかの国の得意にてと、明石の入道をいへる詞をさへと

り出でられたるたくみ、比類なく覚へて侍り。……左、ときべにのあかしと申されし、げに腰折れせぬ柳屋があき物なるべし。ろな
う勝ちて侍るべし。〔略画職人尽〕 縵衣の色まじもの目印くまどり賑ふは車宿くるまどりの丑の日の紅 〔宝船桂帆柱〕 鏡磨 身上を磨き出せしは正直に心

曇らぬ鏡磨なれ 〔天下一は上せうだ〕 〔難波職人歌合〕 下十六番右 鏡磨 暮ると明くと馴れて見るにもいとほるる鏡の影のは
づかしき哉 左の方人云、此の歌もただありにて心明らかなれば、申す旨なし。 判に云、此のつがひは、左右ともに、一節といふ

ばかりもなく、また、難もなし。さればこそ、方人たちのあげつらひもなければ、もつ。

〔本文〕

卅三番

いくしほのへにさらよりもあきのつき

あか／＼とこそすみわたりけれ

水かねやさくるのすますかけなれや

か、見とみゆる月のおもては

左、さしてもきこえず。月のあかきとへに

いくしほ―〔類〕幾入 へにさら―〔類〕へに皿 あきのつき―

〔類〕秋の月 すみわたりけれ―〔類〕澄渡りけれ

かけ―〔類〕影

か、見―〔類〕鏡

きこえず―〔類〕聞えず

のあかきはかほるへきにや。右も、にせ物
さる事なれと、月を、水かね、さくろ、いか、
すまさむ。た、可為持。

心さへひとの気はひに見ゆるかな
さにつらへにのうつりやすさは
うき人のかけたにみえぬか、みとき
わきもすかさてそひふしもかな

左、さにつらへに、尤より所あり。右、わきも
すかさぬ故事、又逸興あり。よき持に侍り。

へにとき

御へに

とかせ

給へ。かた

へにも

候は。

か、見とき

しろみの御

か、みはとき

にく、て。



あかき―〔類〕赤き
事―〔類〕こと

ひとの気はひに見ゆるかな―〔類〕人のけはひにみゆる哉
うつりやすさは―〔白〕〔忠〕うつりやすきは〔類〕移りやすさは
か、みとき―〔類〕鏡とき
そひふし―〔類〕副臥

すかさぬ―〔白〕すかけぬ

へにとき―〔白〕〔類〕紅粉解〔忠〕世三番へにとき紅粉解

かたへにも候は―〔白〕かた紅粉候へく候〔忠〕かた紅粉も候は
候へく候

か、見とき―〔白〕鏡磨〔忠〕かみとき鏡磨〔類〕鏡磨

御か、み―〔白〕〔忠〕御鏡

ときにく、て―〔白〕ときにく、て〔忠〕ときにく、て〔類〕ときに
く、侍

【語注】

◎「紅解」という職名は管見に入らぬが、乾燥して固めた紅を解いて売る職の謂いであろう。ただし、絵の中の言葉に、「かた紅も候は」とあるから、解かないで売ることもあったのであろう。

鏡磨は、水銀や柘榴の汁、砥の粉などを用いて、鏡をときみがく職人。当時の鏡は多くは青銅製で、曇りが生じやすかった。『鶴岡放生会職人歌入合』八番左に「鏡磨」。

紅と鏡とは、ともに女性の化粧に関わる。

◎いくしほのへにさらよりもあきのつきあかくとこそすみわたりけれ 「入」は、染色するとき、布などを染料に浸す回数。その回数が多いほど、色が濃くなる。ただし、ここは、木灰を用いて紅花の赤い色素を抽出する作業の回数をいうか。あるいは、単に、念を入れて精製した、というほどの意か。「紅皿」は、化粧用の紅を塗りつけた皿。その紅皿よりも秋の月が、よりまさっている、というのである。両者とも、丸くて、あか(赤・明)い。

◎水かねやさくろ 水銀や柘榴。ともに鏡を磨ぐのに用いられた。『守武千句』四に、「柘榴也けり命なりけり／鏡磨さ夜の中山今日越えて」の付合があり、また、時代が下るが、『人倫訓蒙図彙』鏡師の項に、「鏡磨ぐには、すずかねのしやりといふに、水銀を合はせて、砥の粉をまじへ、梅酢にてとぐなり」、『歴世女装考』所引の『のちみよ艸』(正徳二年脱稿)二に、「母の話に、我が幼かりし寛永の頃は、鏡は柘榴の汁にて磨ぎしに、その後は、梅の酢にて年中みがく」云々とある。

◎かけ 鏡に映る「影」(鏡像)と月の光の意の「影」とを掛ける。

◎かゝ見とみゆる月のおもては 月を鏡に見立てた歌は、「くまもなき鏡と見ゆる月影に心うつらぬ人はあらじな(長実)」(金葉集三、秋部)など、数多い。

◎さしてもきこえず 「さしても」に、紅を「差す」の「差しても」を掛けるか。

◎月のあかぎとへにのあかきはかるへきにや 月の「明き」と紅の「赤き」とは、同じ「あかき」でも意味が違うから、紅と月とを比較するのは適當でない、というのである。

◎にせ物さる事なれと 「似せ物」は、『俊頼髓腦』に、「又歌にはにせ物といふ事あり。桜を白雲に寄せ、散る花をば雪にたぐへ、梅の花をば妹が衣によそへ、卯の花をば籬島の波かと疑ひ、紅葉をば錦に較ぶ。……」とあるごとく、ある物を他の物に見立てて表現すること。また、その表現。月を鏡に見立てたのはいいが。

◎月を、水かね、さくろ、いかすまさむ 月を鏡に見立てたのはよいにしても、月を水銀や柘榴が澄ますという表現は突飛すぎる、と非難するのである。

◎心さへひとの気はひに見ゆるかな 「気はひ」は、現代「気配」と宛てる言葉で、それとなく感じられる物事の様子。心の中まで相手の気配で分かる、すなわち、相手のつれなさが、ちよつとした物言いやしぐさから見透せる、というのである。なお、「けはひ（気配）」は和歌に用いられる言葉ではない（根来司「中古和歌の語彙」〈講座日本語の語彙3〉）が、ここは、「紅」の縁語「化粧」を掛けて、滑稽感を出したのである。

◎さにつらへのうつりやすさは 白石本、忠寄本は「うつりやすけは」とあるが、誤写であろう。「さにつら紅」は、赤く輝いている意の「さにつらふ」の語幹「さにつら」と「紅」との合成語であろうが、どのような紅であったのか、未考。下に「移りやすさ」とあるから、色の褪せやすい、あるいは、紅そのものの落ちやすい安物であったのであろうか。相手の心がさにつら紅のように移ろいやすい、というのである。

◎うき人のかけたにみえぬ 「影」は、鏡に映った姿。また、面影。鏡が曇っていては姿も映らない。そのように、相手がつれなくて、実際に逢うことはおろか、その面影さえも見えない、というのである。

◎わきもすかさで 鏡磨が上腕を体にくっ付けるようにして鏡を磨く姿勢から、「腋も透かさで」という語を導くのである。「腋も透かさで」は、男女がぴったりと抱き合うことをいうのであろうが、判詞にいう「故事」については未考。

◎そひふし 「添ひ臥し」という語は、「仮りに寝て我が身おどろく手さぐりよ添ひ臥す人は夢かうつつか」（松下集五、恋部）のような例がないではないが、通常、歌に用いる言葉ではない。「故事」との関わりで、あえて用いたか。◎より所あり 三十番語注「より所ある歎」の項参照。「さにつら紅」を、人の心の「移りやすさ」に関連づけた点

を評価するのであろう。

◎わきもすかさぬ故事 白石本は「すかけぬ」と誤る。

◎逸興あり 十番語注「逸興」の項参照。

◎御へにとかせ給へ 『新大系』は「御紅粉をお解かせください」と訳すが、「せ」は尊敬の助動詞と見て、「お解きなさい」と解するのがよからう。勿論、実際に解くのは紅解である。建築業者が「家をお建てなさい」などと勧めるのと同じ。

◎しろみの御かゝみ 「白み」は白銅（錫を多く含んだ青銅）。銀色に近い白色で光沢があり、鏡に用いると映りやすい。後世の例だが、『犬子集』十に、「鏡によきは白みなりけり」とある。ここは「御鏡」と言っているから、貴人の用いる特に高級な鏡なのであろう。

◎ときにくんて 類従本は「ときにく、侍」と読めるが、「侍」は「傳」の草体から来た仮名を書き誤ったものであろう。白みの鏡が磨ぎにくいのは、硬いからか。この点、未考。

◎かたへにも候は 白石本は「かた紅粉候へく候」、忠寄本は、「候へく候」を「も候は」と校合。「かた紅」は、『毛吹草』四に「堅紅粉」、『書言字考節用集』に「燕脂」と見える。乾燥させて固めた紅をいうのであろう。また、『毛吹草』追加上に「かた紅粉といふべき梅のつぼみ哉〔正伯〕」の句を挙げることからすれば、梅の蕾のような色、形をしていたのであろうか。絵の、女が皿に入れて解いているのがそれだと思われる。解いた紅は顔料、かた紅は口紅用か。

【絵】

紅解は、桂巻をし小袖を着る。左手に、かた紅らしいもの入った皿を持ち、右手の刷毛で解いているところ。横に、解いた紅を入れた曲物様の器。前に、かた紅らしいもの入った小皿と空の小皿。明暦板本は、この他に、重ねて置いた椀様の器数個。類従本は、かた紅らしいもの入った小皿を欠く。それぞれの器の形、その中身については、

おもひあまり君には鬼氣の祭してしるしも見えぬ御神樂そうき

月

左の嵐めつらしくとりよせて、心詞ともにいひしられて侍。右哥、初の句み、にたちて侍。たかまの原といふすゑにあまのやへ雲とむすはれたる、やまひにや。されは左勝。

恋

左右いづれも興にきこえ侍。判者およふ所にあらず。何勝とさためかたし。ふたりの男をわかかねて、いくたの川に身をなけし女の心地して。

〔十二番本 東北院職人歌合〕一番

左

医師

むら雲のか、れる月のくすりには夜はのあらしそなるへかりける

右

陰陽師

再拝やたかまの原にすむ月をあまの八重雲か、らすもかな

左の嵐、めつらしくとりよせて、心詞共にいひしられて侍。右哥、初句耳にたちて侍。たかまの原といふすゑにあまの八重雲と結はれたる、病にや。されは左為勝。

左

君ゆゑにこ、ろとつけるやせ病あはぬつきめに灸治してみん

右

おもひあまり君には鬼氣の祭してしるしもみえぬ御神樂そうき

左右いづれも興に聞え侍。判者の及所にあらず。いすれを勝とも定かたし。ふたりのをとこをわかかねて、生田川に身をなけし心地し侍る。

〔鶴岡放生会職人歌合〕二番

左

宿曜師

くもりなく星のやとりはみしかとも月のあはれもすてかたき哉
うき人のむまれの月日問きかんけにあひかたき事や見ゆると

右

竿道

なかむれは月のた、ちは人しらすみちかけするも我そさたむる
うくつらき数のみおほくつもりなはをき所なき物やおもわん

判云、月は、左右歌いつれも、心ありて詞たらず。彼在原朝臣、しほめる色をしたひて、残れる句をたのむにこと
ならず。可為持にや侍らん。恋は、右の哥、九さといふより億兆のうへにもいくらの数か侍らん。をき所なきや、
その道の事たえぬ様になされ侍らん。

〔鶴岡放生会職人歌合〕 十一番左 相人

かねてより月の行ゑのみえしかないふにたかはて雲晴にけり

われといは、あはんと人や思ふとてこふるあたりにならぬにうちなのりつ、

判云、月、左は世のつねの哥さまなり。右……為勝。恋は……左は、恋の行ゑもいますこしたよりあるへくやとて、
為勝。

〔三十二番職人歌合〕 六番・二十二番左 算をき

をくさんのさうしやうしたる花の時風をはいれぬ五形なりけり

算道の指南、五形乃相剋相生を本躰にて、一切の吉凶を判定する事なれば、花の時の相生に、風をはいれぬ五形と
勘あけぬる、いと興あり。……算をきの五行よりもこも僧の一曲やさしくきこゆるにや。

こし程のかりやのうちに身を、けるさん所のもの、うらめしの世や

算をきの述懐、興ほとのかりやのうち、さそとをしはかられ侍り。かうなの貝、かたつふりの家もみな、をのか身
にあはせては不足なきにや。五尺の身、三尺のかりやにて、ひねもすとふ人を待ゐたる。一生涯の果報をも自身に

かんかへぬらん。をけるさん所といひ、さん所のもの、トとつ、けぬる、いとよくいひくたりぬるにや。……此つかひ、持にて侍るへし。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕 一番

医者

思わひさてもいか、はせんしもの恋のやまひの葉ならねは

陰陽師

あはれわか恋の病にくすりなきうき名はかりをきねんにそする

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕 医師・陰陽師 逢ふ事の外には何を加ふべき恋てふものくすしれとも 身の上を見通して社頼まれ

よし薄様のひとへ也とも 〔吾吟我集〕 寄医師恋 人知れぬ恋の病に我死なばいづれの医者になき名おほせん 寄占士恋 君と

我が中こそ下手の占や算頼みをけども逢ふ事もなし 〔職人絵合詩〕 一番 医師・陰陽師 医門流派遠相尋 起死回生方技心 馬勃

牛洩無譚賤 如同敵帯亨千金 保憲晴明拳世推 天文曆法一家師 後來占候妄伝説 陰耦陽奇渠不知 〔古今夷曲集〕 陰陽師 心

あてに言はばや言はん失せ物を置きまどひつつ白波の算〔路春〕 木火土金すいりやうゆかぬ考へにたびたび己が首も投げ算〔源重

保卿〕 〔訓蒙図彙〕 醫、くすし、鑿、同、醫者、醫工也。 ト、うらなひ、卜人、卜者也。 〔長崎一見 職人一首〕 一番 医

師・占師 見れば気の葉ぞ花に三春のやくしを願ふ医者身の身迄も 転じ替へ算の面は見たるとも花の宿なら開け塞がり 左の歌、三

春の薬力、木の葉なる作意也。右の方、花の宿ならば塞がりの方も開けとや。いとまめやかなる心の中、鳩のかひがひ敷くこそ聞こ

ゆれ。持にや沙汰し侍らん。 〔後撰夷曲集〕 医師 薬人を殺さずときく医者ならば聊爾をするな療治よくせよ〔高故〕 〔銀葉夷

歌集〕 医師恋 刺付も恋する事も下手医者の葉袋もなく書きし千話文〔方頼〕 典葉 井の花の水よりも先づ釣りあげんこしら

へ急げやよや粉葉〔行風〕 〔人倫訓蒙図彙〕 医師 医は神農より生まれり。師匠なく忽然として草木の味を知り、八百余种をなめ

て、五臓六腑に通ずる事をさとりて、薬種を始む。是、医の祖師なり。日本におゐては、神代の時、少彦名の命、万病を療治する事、

針灸の道をも始め給ふ也。此のゆへに、日本にては、少彦名の命を医の祖神とす。西洞院五条の天神、是也。此の神の薬方、多く白

朮を用る給ふ也。国土の五穀を守り給ふゆへに、節分に彼の社にをめて白朮を売るも、神代の遺風ぞかし。 目医師 眼は人身

第一の所なり。天性の気血の虚弱によりて、さまざまの眼病あり。最も大切の事なり。／ 小児医師 産前産後等、いづれも一家の別伝あり。諸医の中にむつかしき第一とす。言語かなはざれば、陰陽を分かち、青黄赤白黒の五つを考へ、薬を用ゆるの口伝あることなり。／ 齒医師 本朝にをみて、青陽の初めに齒堅の祝ひ、是齒を養い、長生をことぶくのはじなり。金康をもつて齒医の家とす。此の家に屠蘇白散の法伝はりてあり。／ 外科 外相に出る種物を療するゆへに、外科と号す。外科回春、唐土の粹書也。／ 金瘡 手負、其の外一切の疵、最も詮要の法なり。此の人体、大氣にして初めに動ぜざるをよしとす。小氣にして臆したるは、本人より先に散乱す。是、金瘡の下品也。／ 占師 算置とも。伝へ聞く、周易は伏羲に始まり、これより起こつて断易三世相の法なり。日本にしては、賀茂の保憲、天文道に達せし其の流れなりとも、又は、伯道上人より安陪晴明相伝すともいへり。都には所々に名人あり。俗語に手占い、見通しなどて信仰する也。伊勢近江讃岐などに此の流れあつて、諸国に出づる也。中にも軽行成るは、道のかたはら、門のすみにうづくまりて、下輩の男女を相する也。判の占、五音調子の占、品々あるとかや。〔狂詠大百人一首〕氣よはりの藪薬師 薬箱はまだ宵ながらあけぬるを小者いづこにつるぶせるらむ 〔誹諧職人尽〕薬師・陰陽師 うづき来てねぶとに鳴くやほととぎす〔守武〕 代脈や軋びて帰る雪の朝〔臥蓐〕 枇杷は黄にいそがしぶりや和氣丹波〔沾鱗〕 糸脈を見ばや柳に風の朝〔馬齋〕 連れにして旅の力や香齋散〔白猿堂 和圭〕 絵馬医者のいとど目立つや神無月〔沛雨〕 藪椿玄的は古き名也けり〔寥和〕 陰陽師身の上知らぬ時雨哉〔葛三〕 身の上は何と定めて神送り〔京南居 律山〕 桐の葉は墨付きわろし星祭〔石腸〕 歳旦も序に買はん年八卦〔寥和〕 〔今様職人尽百人一首〕 医師 百病の重き病を治すにもなを薬種ある工夫なりけり 「お脈をごろうじて下されませ」「いま少し待たしやれませ」 〔職人尽発句合〕 二番左 医師 紅白に三代続く牡丹哉 三世ならざる医の薬を服せずといふを、牡丹に寄せて、しかも富貴をほのめかしたる句作、妙術といふべし。……左りも劣らずながら、教へを述ぶるによて、右為勝。／ 三十三番左 陰陽師 陰陽の奇特を見たか初桜 卜筮の術を造作の奇特にたぐへしや。道の妙応さも有るべし。……猶、初桜賞翫すべし也。〔職人尽狂歌合〕 右 くすし 月を見るこよひの医師が手柄にや発散したる風の村雲 ……右、発散もよろしけれど、左の松のたけ高きには並ぶべきにあらず。／ 左 陰陽師 昼の如月の光をしきの神部はあけつ門はひらきつ 左、月を愛づる人の門部をあけおくを、晴明が式の神のふる事に添へてたくまれつる心、殊勝に覚へて侍り。此の作意、なべてならず。定めてさえある人の詠めるなるべし。……左、またき勝にて侍り。「道につきてさうなきものなれば、世人、

さすのみこと呼びつけて候ふ。田町に住める法師の類にては候はず」／右 おんやうじ 庭もせの此の著萩めどしほに占へば月には出でぬ雲の失せ物 ……右、著萩、首尾おかし。可為勝。／左 おんやうじ 今宵秋の著木ゆきを取つていく千里先を見通す月の清明 左、いといたくみに続けられて侍り。……勝負のけぢめ分ちがたくこそ。／右 陰陽師、陰陽師手の筋までも明らかな月を見とほす秋の望の夜 ……右、大方よろしけれど、こたびの歌合に、かかる歌どもあまた人々詠み出で給へれば、めづらしげなき心地し侍り。左まさりぬべくや。／右 おんやうじ あざやかに手の筋までも見通しの天眼鏡の月のさやけさ ……右、一首の風情よろし。但し、天眼鏡は相家の道具にて、陰陽師にはいかがなど、左の方人は申さるべくや。とにかくに、筆の尻とる博士の方、少々まさると申すべくや。／左 陰陽師 老いぬやと人はいさめて陰陽師身の未知らで月を見あかす 左、業平朝臣の、大かたは月をもめでじの心にて、陰陽師の老いとなるをも知らで愛づるさまにとりなされし心、深く感あり。……陰陽師を勝とや申すべき。／右 陰陽じ 身の上を知らぬといへど陰陽師見通しにする秋の夜の月 ……右、陰陽師、同類多ければ、めづらしげなし。左 ……ろなう勝ちて侍るべし。／右 陰やうじ 墨色の雲は失せ物手の筋も見透かすばかり月のさやけさ ……右、墨色の雲おかしく、さやけさも見るばかりなれば、左の庖丁、月影のさすのみこには及ばざるべくや。／右 陰やうじ 集の名の玉兔をめどに見る夜は雲の気けもなき月の清明 ……右、金烏玉兔などいへる文、かの家に伝へて侍りとか。気もなくなど、陰陽師にはつきづきしく聞こへて侍り。もつとも勝ちて侍るべし。〔江戸職人歌合〕二番右 医者 久方の月の桂の枝よりや木草の露も汗と散る覽かやうの道々しき事は職人の堪へざるゆゑにやあらん、左右共無申旨。判云、……右、月の桂を桂枝に取りなされたる意めづらし。勝ち侍るべし。 涙堰く袖とは知るや初春のためにと送る屠蘇の袋を ……左方無申旨。判云、……右は、紅涙の意めづらしうは侍れど、酒に浸すべき葉をさる古裂帛ふるさくに包みては、汚げにて快からずや。左の唐歌は既以失調、右の葉も猶亦不快なれば、なすらへて持などにや。／三番 八卦見・人相見 山の端に棚引く雲は算木にて離中断より漏るる月影 月を見て今はた思ふ天庭の黒氣を厭ふ習ひなりとは 右、不難申一。左申云、天庭の黒氣を厭ふと侍る、其の道にとりては故ある事なるべし。月のためには何の子細か候ふらん。不審。判云、天庭の黒氣は、空の曇るを思はせたるべけれど、心ゆかず。左為勝。 下手算木おきてもねても物ぞ思ふあはぬ日多き心習ひに 言はで思ふ心の見ゆるものならば天眼鏡を人に貸さまし 右、又不難申一。左方申云、右の歌頗感心。判云、左右の哥共に宜しき歟。然而方人申状、既有「優劣」。判者も任「其意」、以「右為勝」。〔近世職人尽絵詞〕 医師 「あはや

うにかしらを振りて、よく頭痛のせぬ」「我ら、いかほどはやりても、駕籠には乗らじ。風が止むと降りねばならぬ、いかのぼり医者など言はるるがうたてし」〔略画職人尽〕世の人の重き命を預かりて力なき医ぞもてあますらん〔難波職人歌合〕上十七番右
医者 月読の持てるをち水得てしがなくすしき業を人にいはれん 左の方人云、万葉集の歌に、月読の持てるをち水いとり来て君に
まだしてをち得しむもの、とも詠みて、月の内に水有り。其の水を飲めば老いも若帰ると云ふ古ことによりて詠めるなめれど、夫は
あやしき業をむねとする巫女、祝部などのいふことにこそあれ。草根木皮の薬力をもて病毒をうつべき身になりながら、人笑へなる
ねぎことと云ふべし。 右方答、神代巻に、大汝の命、少彦名の命と心を合はせて、うつくしき青人草、又、畜産の為に、療病の法
を定め、鳥獸昆虫の災異を払ふ禁厭の法を定むとある、これ則ち医の始まりにして、医の字をやがてくすしと訓み、薬の字をくすりと
と訓むも、ともにあやしくすしき業をたたへて云へるにこそあれ。いかでか薬法と禁厭とをことものなりと云はん。 判に云、
……右の歌、左方の論よりも、右方、いみじう答へられたり。猶いはば、医は皇国の古伝のみならず、漢法の配劑も、全く薬力と呪
詛との二つに渡れること、かしの医書どもを見ても知らるるをや。はた、結句、人に知らせんと、大方ならばいふべきを、いはれ
んとしも結ばれたる口つきさへ唯ならず聞こゆ。こよなき勝といふべきなり。 / 下五番右 易者 人の恋なりもならずもさす身
にて心の占のまさしくもなき 左の方人云、古今集に、かく恋ひん物とは我も思ひにき心の占ぞまさしかりける、といへるは、深く
恋ふる事を、兼ねてそらにされるよしなれば、其の心をもて見る時は、此の歌は其の裏にて、恋ふる事はなき心となりて、いといと
いかに聞こえたり。 右方答、ともかくにも心に思ふ事のたがふを云へるにこそあれ。古歌なればとて、一首の詞にかかはりて
物を定めいふは、かたくなといふべし。 判に云、……右の歌、左の方人の論は、もとよりかたくななり。人の上をさす身にて、我
が身の上は思ふことゝのたがへるを歎きたるにて、諺に、陰陽師身の上知らず、といへらんが如く、心詞ともにあはれにととのひて、
いとめでたしと聞こえたり。こよなき勝といふべし。

【本文】

卅四番

かせこ、地あれはや、かてつくしやみ

かせこ、地―〔類〕風心地 あれはや、かて―〔忠〕あれはややかて

あま気の月のはれそめにける
見ぬからにこよひの月ははれぬへし
ゆふけの風をうらかたにして

左は、哥のやまひはなくて、こしの病あり。

右は、月にむかひたる心すくなし。可為持敷。

あはれわか恋のやまひそくすりなき

うき名はかりをたちものにして

こひしにて後もやあふとこゝろ見に

わか人かたの身かはりもかな

右、葉なければたち物は、よくおもひより

ためり。右は、こゝろふかくて、哥から

よろし。為勝。

くすし

殿下より、そくめい

たう、とくはかさんを

めされ候間、た、今あはせ

出候。

おんやうし

われらも、今日、



あま氣一〔類〕雨氣 はれそめにける一〔類〕晴そめにける
見ぬからにこよひの月ははれぬへし一〔類〕みぬからに今宵の月
は晴ぬへし
うらかた一〔忠〕そらかた〔類〕占方

敷一〔白〕ナシ

わか一〔類〕我 やまひ一〔類〕病 くすり一〔類〕葉

たちもの一〔類〕たち物

こひしにて一〔忠〕明一〔類〕こひちにて〔類〕こひ路にて あふ一〔類〕

逢 ころ見にて一〔類〕心みに

おもひよりのためり一〔類〕思ひよりのためり

ころ一〔類〕心 哥から一〔類〕歌から

くすし一〔白〕〔類〕医師〔忠〕卅四番 医師

そくめいたう一〔白〕〔忠〕そく命湯〔明〕統命湯〔類〕統命湯

とくはかさん一〔白〕〔忠〕とくはか散〔明〕独活散〔類〕独活散

た、今あはせ出候一〔白〕〔忠〕唯今あわせ候〔類〕た、今あはせ候

おんやうし一〔白〕〔類〕陰陽師〔忠〕陰陽師

われら一〔白〕〔忠〕我才 今日一〔白〕〔忠〕〔類〕今日は

晦日御祓

持参候へきにて候。

【語注】

◎陰陽師は、陰陽五行説に基づいて、吉凶を占ったり、呪術を行ったりする者。病氣平癒の祈祷も行ったので、医師と番われている。

五番本『東北院職人歌合』一番に「医師・陰陽師」、十二番本『東北院職人歌合』一番に「医師・陰陽師」、『鶴岡放生会職人歌合』二番に「宿曜師・筆道」、同十一番左に「相人」、『三十二番職人歌合』六番・二十二番左に「算をき」。

◎かせこゝ地 病氣の「風邪」に、吹く「風」を掛ける。

◎つくしやみ 未考。「筑紫病」で、当時流行した伝染病か。上に「風邪心地あればや」、下旬に「はれそめにける」とあり、判詞に「腰の病」とあるから、風邪が誘因で起こる腰部の腫瘍であろうか。『中世職人語彙の研究』（「つくしやみ」の項）および『新大系』は、陰腫などの女性の下の病であるうとする。「病」に「闇」を掛けて、下旬の「雨氣」に続く。

◎あま氣の月のはれそめにける 風が雲を吹き払って、雨模様だった月が晴れ出した、というのである。「晴れ」に、「腫れ」を掛ける。「腫る」は、雲に覆われていた月が次第に姿を表すことを言うか。なお、「晴る」と「腫る」の掛詞は、『竹馬狂吟集』にも、「雲のはらにも付くる膏薬／月星はみなはれものたぐひにて」とある。

◎見ぬからにこよひの月のはれぬへし 「からに」は逆接の用法。まだ見ないまでも今宵の月が晴れるであろうことが分かる、というのである。

◎ゆふけの風をうらかたにして 「うらかた」は、忠寄本は「そらかた」と読めるが、誤写であろう。「夕占」は、夕方、道端に立って、通行人の言葉を聞いて吉凶を判断する占い。「言靈の八十のちまたに夕占問ふ占まさにのる妹はあひよらむ」（万葉集十一、寄物陳思）など、万葉集に十例ばかり用例がある他、後世の歌にもまま用いられる語

であるが、「夕占の風」という例は、管見に入らない。「占形（方）」は、亀甲、獸骨などに現れた占いの結果をいうが、ここは、夕方の風の吹き具合を占形として、判断しようというのである。その実、夕方の風で宵の天候を予測するぐらいは、だれにでもできることである。なお、「占形」という語は、「思ひかね恋しき人をえものにて問ふにかなへる占形もがな（源仲正）」（為忠家初度百首）の例があるが、通常、歌に用いる言葉ではない。

◎**哥のやまひはなくて、こしの病あり** 「哥の病」は歌病（九番語注「る、の病」の項参照）。「腰」は、歌の第三句。「腰の病あり」は、第三句に欠陥があること、すなわち、いわゆる腰折れ歌であることを、普通は意味する。ただし、ここは、「歌の病はなくて」とあるから、ことさら第三句に「つくし病」という言葉を用いた以上は、たとえ歌に欠陥はなくても、「腰の病」と難ぜざるを得ない、とこじつけたのである。加えて、「つくし病」が腰部の病だということと掛けてあるのであろう。

◎**月にむかひたる心すくなし** 単に、月が晴れるであろうと予想しているだけで、実際に月を見ているわけではない点について言う。

◎**可為持歎** 白石本は「歎」を脱す。

◎**あはれわか……** 『飛鳥井雅康 職人歌』陰陽師の歌に、「あはれわか恋の病にくすりなきうき名はかりをきねんにそする」。

◎**わか恋のやまひそくすりなき** 二十四番語注「恋のやまひのくすりならねは」の項参照。本職人歌合、二十四番右煎じ物売の恋の歌（飛鳥井雅康 職人歌）では医師の歌）の「恋の病の葉ならねば」も、同想。

◎**うき名はかりをたちものにして** 「断物」は、神仏に願をかけてその願が成就するまで、特定の飲食物を断つこと。また、その飲食物。上句の「葉なき」に依じて「断物」を出し、憂き名が「立つ」ばかりだということを言い掛けた。「名」に「葉」を掛けるか。

◎**こひしにて** 忠寄本、明暦板本は「こひちにて」、類従本は「こひ路にて」とするが、意味が通らない。「恋ひ死にて」を「恋路にて」と誤解したための誤写であろう。「恋ひ死ぬ」は、恋い焦がれて死ぬこと。恋の歌にしばしば用

じた薬で、癩癩などの治療に用いたらしい。

◎とくはかさん 白石本、忠寄本は「とくはか散」、明暦板本は「独活散」、類従本は「独活散」。「とくはか」は、「ドクワツ」の転訛で「ドクワカ」と発音したか。あるいは「とくはつ」の誤写か。「独活散」は、『中世職人語彙の研究』に、『中国医学大辞典』所引の『證治準繩方』を引いて、「効用 消風、化痰。薬品 独活、防風、藁本、旋覆花、川芎、蔓荊子、各一両。細辛、石膏、甘草（炎）、各五錢」という（「続命湯・独活散」の項）。「独活」は猪独活ししうどの根。◎めされ候間 「間」は、原因・理由を示す接続助詞であるが、主として変体漢文や候文などに用いられ、室町中期以降、純粋な話し言葉で用いられることはなかった（小林千草「中世口語における原因・理由を表わす条件句」〈『国語学』94〉）本職人歌合でも、この他は、六十九番右 俱舎宗の言葉に、「北斗の御祈はじめ候間、ひまなく候て」と見えるのみ。医師や僧侶が、勿体ぶった物言いをしていたことの反映であろう。

◎あはせ出候 白石本、忠寄本、類従本は「出」を脱す。「合はせ出づ」は、調合して作り出すこと。

◎今日 白石本、忠寄本、類従本は、「今日」は。

◎晦日御祓持参候へきにて候 「晦日御祓」は、六月と十二月の末日に、宮中、その他で行う禊。ここは、その禊に用いる人形ひとがたをいうか。「候べきにて候」という言い方は、本職人歌合では、この陰陽師の言葉のみに見える。医師の「候間」と同様、勿体ぶった言い方だったのであろう。

【絵】

医師は、立烏帽子狩衣袴姿で、右手に処方を書いた薬袋、右手に扇を持つ。前に、もう一つの薬袋と、薬を調合するための乳鉢、乳棒。立烏帽子や狩衣は、堂上家が常用していたもので、この医師が常上家と関わっていたことを示しているであろう。白石本は両方の薬袋、忠寄本は前に置いた薬袋に処方を書かない。また、白石本、忠寄本の乳棒にあたるものは匙のように見える。

陰陽師は、風折烏帽子狩衣袴姿で幣を持つ。

【参考】

○ 弓矢にあまた知る事ぞある

棟上げに時日をとるは博士にて

〈宗砌〉

（新撰菟玖波集）

○ いちはや河の神の御誓ひ

ねぎごとを黄楊の小櫛の占まさし

（異体千句、二）

○ たづねつる人の行末を今聞きて

占ふ事ぞまさしかりける

〈清玉〉

（因幡千句、七）

○ 逢ふまでではなくともしばし慰めよ

そのよしあしに頼む占方

（三嶋千句、十）

○ 問ひ寄る里も契りなるらん

占へる人に任せよ身の行末

〈宗友〉

（葉守千句、二）

○ 陰陽の頭の背戸の恋しさ

六害の水汲むをなごみめよくて

（新撰犬筑波集）

○ 陰陽師輿に乗りて帰るらん

先へひかせて通るむまの日

（同）

○ いみじき連歌ずきなる薬師ありけり。昨日の御薬とて取りにまうできたりけれど、聞き入れざりければ、内より包みて書き付けて遣はすべきよし申しければ、せめられて、

生姜三へぎに帰る雁がね

と書きて遣はしけり。

（俳諧連歌抄）

○ 権の頭は左近の尉に助けられ、くうくうとしてありけるが、姫君失せ給ひけることを悲しみ、明け暮れ涙にむせび

けり。昔物語に聞き及びし晴明のゆかりの末の人とやらんに、まさしき算の上手のありけるを招き寄せて、姫君の失せ給ひける占ひをこそ頼まれけれ。姫君の御年は十七なり。権の頭の年は百余歳なり。占形にいはいはく、水剋火と戦ふなり。失せ給ひける御人、まづはこのまま様変へて、いかなる山の奥へも向かんと御ころぞしありけるが、都にある人と御かたらひ候うて、比翼の御契り浅からず。今は昔語りをば世にあさましきことにおぼしめし、ことに都に隠れなき、手きき、鼻きき、口つきのはやさ、いかなる穴の底までもわりなく入りて鼠取り給ふ、笛吹き猫の坊を飼ひ給ふなり。この上は、御身の用心をなし給ひて、重ねて君の御ことおぼしめし出づることあるべからずとて、急ぎ算をぞはらはれける。

(鼠の草子)

○かやうに候ふ者は、下京辺に住む者にて候ふ。われこの間うち続き夢見悪しく候ふ程に、晴明の許へ立ち越え、夢の様をも占はせ申さばやと存じ候ふ。……いでいで転じかへんとて、茅の人形を人尺ひとさかに作り、夫婦の名字ななづけをうちに籠め、三重の高棚五色の幣、おのおの供物を調へて、肝膽を碎き祈りけり。謹上再拜、それ天開け地固まつしよりこの方、伊弉諾伊弉冉の尊、天の磐座にして、みとのまくばひありしより、男女夫婦の語らひをなし、陰陽の道、永く伝はる。それになんぞ魍魎鬼神妨げをなし、非業の命を取らんとや。大小の神祇、諸仏菩薩、明王部天童部、九曜七星、二十八宿を驚かし奉り、折れば不思議や雨降り風落ち、神鳴り稲妻頻りに充ち満ち、御幣もどざめき鳴動して、身の毛よだちて、恐ろしや。

(謡曲「鉄輪」)

○われ王法を傾けんと、仮に優女の形となり、玉体に近づき奉れば御悩となる。既に御命を取らんと、悦びをなしし処に、安倍の泰成、調伏の祭を始め、壇に五色の幣帛を立て、玉藻に御幣を持たせつつ、肝膽を碎き祈りしかば、やがて五体を苦しめて、やがて五体を苦しめて幣帛をおつとり飛ぶ空の、雲居を翔り海山を越えてこの野に隠れ住む。

(謡曲「殺生石」)

○抑もこれは源の頼光とはわが事なり。さてもこの度丹波の国、大江山の鬼神の事、占方の言葉に任せつつ、頼光保昌に仰せつけらる。

(謡曲「大江山」)

○我が中にて、鳥羽の院の御時、宮人たりしが、経論、聖教、詩歌、管弦にいたるまで、問ふに答への暗からず。身

体曇りなければとて、玉藻の前と召されける。しかる所に、変化の物にてある間、御かどを悩まし申す。あべのやす也占つて申す、玉藻の前が態と申す。調伏の祭あるべしとて、四段をつき、五段をかざり、五色の幣を立てて祈られる。しかるに、叶はじとや思ひ、七尋あまりの狐となり、大内を逃ぐる。〔天正本狂言「つりぎつね」〕

○是は此の辺りに住まひする者。某、美しい牛を持つて候ふが、此の間、暮れに失せて候ふ。こなたかなた尋ね申せ共、御ざなひによつて、占方を頼み、算の置かせて御ざれば、是より東の在所に当たつてあらふずる、と申すほどに、参つて尋ねばやと存ずる。〔天理本狂言「横座」〕

○たんでうけんろぎんなんば……金生水、木生火、……土生金、水生木、鼠桁走れば猫きつと睨む、……一遊魂、二絶命、三禍害、四てんい、五福德、六遊年、七生家、八絶体、……兎上断にこんかいれん、大風吹けば古家の崇り、……一徳六害の水、二義七陽の火、三生八難、四殺九厄、五き……〔天理本狂言「いぐる」〕

○薬種も持たぬ瘦せぐすし、くく、黄蘗や頼みなるらん。是は洛中に住居するものでござる。是へ出る事、余の儀にあらす。洛中には御典薬の、ひくの山のと申して、上手のくすし多ひによつて、わきわきにゐる我らが様なる藪ぐすしには、身代のよひものは脈を取らせもいたさぬ。たまたま脈を取らせ薬を飲ふでも、しかしかと薬代もくれぬに依つて、妻子をはごくまふやうも御ざなひ。承れば、東にはくすしがまれなと申す程に、罷り下つて、上手の名取りをいたさうずると存じ、ふつと思ひたつて御ざある。〔虎明本狂言「かみなり」〕

○われらの修道僧は、医療を心得ていると、デウスへの愛から無料で治療をする。日本のほとんどの医師は仏僧で、彼らはその報酬によつて生活している。〔日本覚書、四〕

○われらにおいては、瘰癧、結石、足通風、およびペスト（といった病い）は日常茶飯事である。日本では、これらすべての病いが稀である。〔同、九〕

○われらは（治療の際に）瀉血をおこなう。日本人は（治療の際に）草をつけた焼きごて（灸）を用いる。〔同〕
○われらにおいては、男はふつう、腕から瀉血をおこなうのが習わしである。日本人は（瀉血に）蛭を用いるか、さもなくば、小刀でもつて額におこなう。馬には刺絡針を用いる。〔同〕

- われらは浣腸または灌注をおこなう。彼らはこれらの療法をまったくおこなわない。(同)
- われらにおいては、医師が薬局に宛てた処方を書く。日本の医師は自分の家から薬を届ける。(同)
- われらの医師は、男および女の脈をとるのに、まず、右腕、次いで左腕でとる。日本人は、男は初め左腕、女は初め右腕でとる。(同)
- われらの医師は、病気をよりよく知るために尿を調べる。日本人は、けつしてそれを調べない。(同)
- ヨーロッパ人の肉体は繊弱なので、健康の回復はたいそう遅い。日本人の肉体は強健なので、重傷、骨折、潰瘍、および災厄からも(われら)以上の見事さで常態に復帰するし、それがまたじつに速やかである。(同)
- われらにおいては、傷(口)を縫う。日本人はそれに膠を塗った紙片をはる。(同)
- われらが布を用いておこなうすべての治療を、日本人は紙でおこなう。(同)
- われらにおいては、潰瘍を火で焼く。日本人は、われらの外科の醜い治療を受けるくらいなら死んでしまった(ほうが)まじだと思ふであ)ろう。(同)
- われらは、食欲のない病人に対して、つとめて無理にでも食べさせようとする。日本人は、それを残酷だとみなし、病人に食欲がなければ、そのまま死ぬにまかせる。(同)
- われらの病人は、敷布、敷布団、および長枕のついた折りたたみ寝台もしくは寝台に寝かせられる。(病気の)日本人は、地面の蓆の上に木の枕を置き、上に着物をかけて寝かせられる。(同)
- ヨーロッパでは、牝鶏と雛鶏とは、病気のための薬とされる。日本人はそれを毒だと考え、病人には魚と塩漬の大根とを与えさせる。(同)
- われらは、抜歯鋏、銅子、鸚鵡の嘴などを用いて歯を抜く。日本人は、鑿、小槌、歯につける弓と矢、または鉄の釘拔を用いる。(同)
- われらの香料や薬は、乳鉢または臼のなかで搗りつぶす。日本では、両手に鉄の輪を持ち、銅製の舟型容器のなかで搗きまくる。(同)

○われらにおいては、真珠と小粒の真珠とは人びとの装身に用いる。日本では、薬にするために播りつぶすよりほかに用途はない。 (同)

○われらにおいては、医師は試験を受け(合格し)ていなければ、処罰されるし、治療もできない。日本では、生計をたてるために、望む者はだれでも医師になれる習わしである。 (同)

○われらにおいては、横痃よこねにかかると、きたならしく、恥かしいことである。日本では、男も女もそれをありふれたこととして、少しも恥とはしない。 (同)

○日本ではこれら占星術師や占師の多くが、都市や地方を歩きまわってこの業を営み、自分の利益になるように当ててもらいたい気持を持ってこの種のことを尋ね、自分自身の運命を話してもらうために訪れる、あわれな大衆をだましまわっている。そして、その人が自身の生まれた年月を知らない場合でも、占いを立ててやり、それによってその人の持つている運命を引き出してやる。……この連中は日本でもまたシナと同じように、博学であることを見せるために書物やそのなかの図を眺め、さまざまの手のこんだ形式を作り、勿体ぶって、もっともらしくある方向に向きを変えたりして、あわれな人たちをだましている。そのあわれな人たちは懐中から金を取り出し、その予言または占いに大いに満足し、もとの状態のまま去って行く。……シナと日本の王たちは、王家の職務として占星術の数学者たちの学校コレジオを持っていて、彼らに貴族の特権を与え俸祿を給している。……これらの占星家は、日本では天文博士 *temburfacaxe* または天文学士 *tembungoeuji* [*tembungaeuji*] と呼ばれ、それは占星家と自然的魔術の占師である陰陽師 *vonhhoji* [*vonmhōji*] を意味する。 (日本教会史、二巻、一六章)